

あとがき

明治二十二年に町村制が施行されてから百周年という節目に、郷土鳴沢村の起源、歴史、現状などを明確にして、正しい認識をもって時代への対応を図るとともに、村の未来社会を担う人々に、郷土の姿を正しく伝えるという目的で、鳴沢村誌刊行の計画が立案され、昭和六十年九月定例村議会で出版物請負契約を承認、同十月四日契約の締結を行い諸々の準備が進められ、いよいよ実動という段階でこの編纂事務局のバトンを渡されました。

全く未知の分野のことであり、正直いってどんなことになりましたやらと心配を致しましたが、小林喜重前事務局長が周到な準備をして下さっておりましたし、出版の契約は、県内の既刊市町村誌を数多く手掛け、豊富な経験をお持ちの山梨日日新聞社と締結されておりましたから、こちらに頼り切っていけば何とかなるのではと、楽な考えを持つことに致しました。

それにいたしましたも、村誌編纂という事業は、既発行の市町村誌においては十年がかりの大事業だったというところで、すでに十年以上かかっているにもかかわらずに困っている所の話なども聞いておりましたが、短期間に完成させるという山梨日日新聞社のご努力によって、執筆者には、各分野から権威ある先生方をお願いできたこともあって、何回か打ち合わせを重ねるうちに必ず良い村誌ができるかと確信できるようになりました。

いよいよ資料収集の段階に入ると、執筆の先生方がたびたび来村されるようになり、現地調査、写真撮影その他資料の収集、取材が再三繰り返され、そのたびに公民館や役場に集まっていた方々、ご自宅に温かく迎えてくださった方など、村民の皆さんの御協力をいただくなかで順調に進行していきました。

古文書等の資料提供のお願いは、広報「なるさわ」や、無線放送施設によって呼びかけを行い、各方面からご提供いただきました。

長い間目の目を見ずに、鼠や虫に食い荒されているもの、長い歳月に紙と紙が圧着状態となり、広げるのも恐ろしい状態のもの等様々でありましたが、どんなに汚れていても、食い荒されていても、村誌に使える資料を見つけ出したときは本当にうれしく思ったものでした。

資料は、個人が所有するものは割合に少なく、その点では収集が困難だったということになるのですが、鳴沢村は一時期を除けば、そのほとんどを単村で経過しておりますので、役場にある程度は文書類が保存されていたため、これが大いに活用されて村誌のなかに生かされています。

短期間に完成させるということで、方言調査や民話調査をはじめ各種の調査にご協力いただいた皆さん、資料提供をお願いした方には大変なご無理を申しましたが、進んで御協力いただき、また貴重な資料を快くご提供下さいまして本当に有難うございました。

短い歳月にもかかわらず、村の皆さんのご支援と御協力、執筆して下さった諸先生方、山梨日日新聞社、サンニチ印刷のご努力によって『鳴沢村誌』が誕生したことを心から感謝申し上げます。

昭和六十三年一月

鳴沢村誌編纂委員会事務局長

三 浦 忍